

学校運営計画（4月）		総合評価	
教育目標	<p>本校の教育は、法に定められた根本精神と、本県学校教育の指導方針に基づき、豊かな人間性や社会性を培うとともに、科学的な思考力と創造性を身に付け、科学技術の発展と進歩に寄与する心身ともに健全な人間の育成を目指す。</p> <p>(1) 豊かな知性と感性をもった思いやりのある人間性を育てる。 (2) 科学的な思考力を培い、自ら学び、自ら考える力を育てる。 (3) 個性の伸長に努め、意欲的な進路実現を目指す。 (4) 日々の生活の中で共生の精神を養い、幅広い社会性を育てる。 (5) 生涯にわたって、自らの健康を保持増進し安全を確保できる実践力を育てる。</p>	B	
運営方針	<p>全教職員の持てる力を結集し、明るく元気でさわやかな学校づくりを目指す。そして、あらゆる機会（Chance）を生かし、自分を変革し高め(Change)、粘り強く挑戦する(Challenge)生徒の育成を目指す。</p> <p>また、開校二年目の青翔中学校のスムーズな運営と特色ある学校づくりに向け、教育委員会とも連携して取り組む。</p>		
平成26年度の成果と課題	<p>本年度重点目標</p> <p>具体的目標</p>		
<p>全国初の理数科単科高校として開校して11年が経過、この間、理数科の特色ある様々な教育活動の取組と成果が評価され、文部科学省からスーパーサイエンスハイスクールの指定を受けた。また、タイ国の王立サイエンスハイスクールの姉妹校と理数教育を中心に交流を進めてきた。</p> <p>S S H指定研究を軸として、学校設定科目「探究科学」の成果を、各学会において発表、各種コンテストにも積極的に参加、実績を着実に積み上げつつある。</p> <p>しかしながら、一方で「自分で考えて行動する」、「自主的に根気強く問題解決に取り組む」、「家庭学習の習慣を身に付ける」、「提出期限を守る」等については、不十分さが見られる生徒もいる。生徒には、これらの力を育成し、併せて規範意識の高揚、部活動など生徒の活動の活性化が、引き続き課題である。</p> <p>S S H継続の申請の準備のため、実績・成果を目に見える形にしなければならず、さらに成果を発展的に積み上げる努力が求められるとともに、教科間の連携、教科横断的な取組、地域との連携等に力をそそぐ必要がある。</p> <p>さらに、奈良県初の併設型中学校の学校経営を軌道に乗せ、魅力と特色のある中学校となるよう取り組まなければならない。</p>	<p>併設型中学校が開校二年目を迎え、将来を展望した魅力と特色ある学校運営をめざし、青翔中学の存在価値と評価を確立する。</p>		<p>県教育委員会指導の下、青翔中学校の施設・設備、教育課程、その他教育環境等を学年進行とともに整えていく。6年間を見通した中高一貫教育の内容を明確にし、月1回の保護者会、週1回の学級通信の発刊などの他、小学生及びその保護者等への積極的な広報も展開する。</p>
	<p>教職員は、教育専門職としての自覚のもとに、「学び続ける」必要がある職種である意識を持つ。</p> <p>教職員各々のもつ特性を生かして、中高一貫教育を展望した特色ある学校づくりに努める。</p>		<p>研修に対する意識の高揚を図り、公開研究授業を実施し、情報の共有化と共通理解を推進する。青翔中学校と青翔高等学校を一体としたリーフレットの作成、学校だよりの発行、Web Siteの充実等による積極的な広報を展開する。</p>
	<p>自ら探究する力や伝える力を身に付けさせ、生徒が夢を実現できる学校づくりに努める。</p> <p>スーパーサイエンスハイスクールの再申請を目指す。</p> <p>S S Hの取組の一環として、タイのサイエンスハイスクールとの交流を発展させる。</p> <p>地域との連携を一層充実させ「地域の学校」を目指す。</p> <p>併設中学校において、S S Hの取組を段階的に取り入れ、生徒が興味関心を抱くようにする。</p>		<p>体験重視型理数科教育プログラムの研究成果をまとめ、再申請に認可されるよう実践力を深めた計画を策定する。</p> <p>探究活動の充実にも努め、各種学会発表・コンテストにも積極的に参加する(延120人)。また、本校独自の理数科教育システムを活用し、国立大学への進学を目指し、学校をあげて組織的に取り組む。</p> <p>タイのサイエンスハイスクールと共同研究を実施し、生徒・教員の交流にも積極的に取り組み、タイで行われる「発表会」に派遣する。</p> <p>併設中学校でのS S H事業の関わり、展開の仕方について検討・実施する。</p>
	<p>生徒の自主性を育て、互いに認め合い高めあう集団づくりに努める。豊かな知性と感性をもった思いやりのある人間性を育てる。</p> <p>人権を尊重し合える集団の確立と、自他を敬愛する心や公共心・道徳心、規範意識の高揚に努める。</p>		<p>生徒一人一人の人権感覚・人権意識を高め、人間としての生き方やあり方を身に付けさせ、明るく温かい人間関係を醸成する。自主性や主体性、協調性を育てる集団活動を充実させ、学校行事及び体育・文化系部活動を活性化させる。</p> <p>HR活動を充実させるとともに、学校生活のあらゆる場面で、基本的な生活習慣の確立ときめ細かな生活指導を行う。</p> <p>全教育活動に道徳の観点を入れ、自他を敬愛する心や公共心・道徳心をはぐくみ、規範意識の高揚に努める。</p>
	<p>教科指導力を高め、ねらいを明確にした授業及び指導法の研究・実践に努め、生徒の基礎学力の定着と応用力の向上を図る。さらに、教科指導を通じ、科学的な思考力の育成に努める。</p>		<p>自宅学習の定着を目指し、基礎学力とともに高度な学力を計画的に育成する。土曜・長期休業中の学力伸長講座、ステップアップ講座、学力補充講座、勉強合宿等を実施する。また、教材研究、指導法や評価について指導主事の招聘や教育研究所の講座を活用し積極的に研修に努める。</p>
	<p>日常の教育活動を点検し、学校・家庭・地域の連携をさらに深める。生徒の実態を的確に把握して、個に応じた適切な指導・支援に努め、健全な発達を促す。</p>		<p>生徒が抱える問題の早期発見、早期解決に努める。生徒理解に努め潜在能力を発見し引き出し、実体験をとおして「努力」が「よろこび」や「やりがい」につながる成就感や達成感を体得させ、探究心や向上心をもたせる。</p>
	<p>二年後の高校入学定員減に向け、学校経営・運営上のあらゆる場面から課題を見直し、その対策に取り組み始めなければならない。</p>	<p>部活動のあり方を見直す。</p> <p>進路指導・教科指導法等ダブルスタンダードに対応できる、教員の意識改変と「力」の育成する。</p>	

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策・評価指標	自己評価結果		成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価（結果・分析） 及び改善方策	
教 務	併設中学校の教育課程等を魅力と特色あるものにする。	中高一貫教育の内容を明確にし、6年間を見通した教育課程案を作成する。	B	B	B	<p>まだまだ手探りの状態であるものの、中学校開校2年目となり、昨年度の反省を生かし、より充実した教育課程、学校行事を実施することができた。</p> <p>S S Hの再申請に対応する教育課程を、かなりの時間をかけて検討し、作成することができた。</p> <p>中学校の授業も含め、各自が評価法、指導法の研修に取り組んできたが、全体での研修会をもつことはできなかった、</p> <p>充実した授業と、長期休業中の学力補充の実施により、基礎学力の定着に努めた。毎日少しでも自宅学習する生徒は普段の生活では高校生72%、中学生93%であった。</p>	<p>高校への効果的な学習の移行が行える教育課程の編成を検討していく。</p> <p>S S Hの決定の可否により、教育課程の検討を深めていく。</p> <p>指導法や評価法の研修に加えて、公開授業の形態についても検討していく。</p> <p>分かる授業を実践することにより、学習に興味・関心を持たせ、基礎学力の定着に努める。</p>	<p>中高一貫6年間の継続した学習を効果的に行える教育課程の編成に取り組んでいる。</p> <p>S S Hの再申請の結果は未だ未定だが、新たな5年間の理数科教育課程の編成に取り組んでいる。</p> <p>授業公開に取り組んでいるが、参観率は一向に上がっていない。</p> <p>今後、高校においても観点別評価について、検討、研修等が必要である。</p> <p>授業アンケートを計画的に実施し授業改善に生かしている。</p> <p>習熟度別少人数学習を取り入れ、効果を上げている。</p>
		中学生の特徴・発達段階を理解し、さらに高校とも連携した学校行事を計画する。	A					
	理数科高校として、より充実した教育課程を検討する。	スーパーサイエンスハイスクールの再申請に伴い、体験を重視した教育課程案を作成する。	B	B				
	指導法の研修・実践に努め、指導力の向上を図る。	公開授業を実施し、研修を深め、教科の指導力を向上させる。	B	B				
		中学生への授業の教材研究や指導法、評価法について、指導主事等による研修会をもつ。	C					
生徒の基礎学力の定着と応用力の向上を図る。	学力補充講座を実施し、生徒個々の基礎学力を高める。	B	B					
	生徒の生活実態を的確に把握し、課題の提出・点検等により、自宅学習の定着を目指す。毎日自宅学習をする生徒70%以上にする。	A						
生徒指導	現在取り組んでいる全校体制による生徒指導をより一層、強化・推進し、基本的生活習慣の定着と規範意識の積極的啓発を図る。その結果として、生徒自身が誇りをもてる学校づくりを目指す。	校門指導・昇降口指導・校内巡視などを毎日行い、生徒とのコミュニケーションを図る中で、生徒理解に繋げ、規範意識高揚を図る。	A	A	<p>様々な場面で意識啓発や継続的な指導を続けた結果、一定の成果が見られたように思う。問題行動や特別指導は激減し、生徒たちは落ち着いた学校生活を送っている。</p> <p>しかし、価値観が多様化したためか、こちらの思いが伝わらない生徒や保護者の割合が増えてきたように思うし、その対応に時間を取られている現状がある。</p> <p>引き続き、愛校心の喚起と帰属意識の発揚を促し、生徒の自主的自発的な行動を期待したい。</p> <p>教員側がチャイムと同時に授業が始まる環境を整えているため、不注意による入室遅れはほぼ皆無と言えるが、朝の遅刻はなかなか減少しない。基本的生活習慣確立のため、家庭との連携をさらに密にしたい。</p> <p>家庭内の問題や交友関係に適応できず、日々の生活に支障を来している生徒に対して、効果的な指導や助言を行う難しさを感じる。いじめアンケートや生活アンケート等では深刻なケースは報告されていないものの、しかし、ほとんどの生徒がスマートフォンを使用しているため、LINEなどのアプリによるトラブルも散見した。今一度、コミュニケーションや真の友情などについて考える機会をもたせたい。</p>	<p>各種集会を効果的に利用して、規範意識を向上させるような働きかけを行う。</p> <p>教師間の情報交換や保護者との連携を効果的に行う。特に初期対応に際しては、迅速かつ慎重を期す必要がある。</p> <p>教員側の規範意識の高揚も図る必要がある。</p> <p>学校や生徒を取り巻く環境が刻々と変化する現在、教員向けの生徒指導研修会を積極的に企画し、今にふさわしい生徒指導の構築を目指したい。</p> <p>朝夕の校門指導・昼休みの校内巡視・定期的な校外巡回指導などを生徒指導部だけでなく全校体制</p>	<p>全ての教職員が日々の校門指導、昇降口指導、校内巡視等を行い、生徒とのコミュニケーションを取りながら生徒理解を図り、規範意識の向上に取り組んでいる。</p> <p>生徒の実態をアンケートなどでよく捉え、教職員間で共通理解の下、連携協力して生徒指導に取り組んでいる。</p> <p>いじめ等に関しては、アンケート等で把握に努め、いじめの防止・指導に取り組んでいる。</p> <p>薬物の乱用防止やNET犯罪、制服の着こなし等の講演会をもつなど、計画的に規範意識の高揚を図っている。</p>	
		時間厳守の精神を徹底し、遅刻や入室の遅れの絶無を目指す。挨拶を励行し、元気で生きびした生活習慣の確立を図る。	B					
	中1から高3までの学年の幅にわたる生徒が安心して登校し、生活できる学校を目指す。	人権教育部と連携し、生徒の悩みを積極的に・共感的に受け止め、これに応える指導や助言を与える。	B					
				A				

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策・評価指標	自己評価結果		成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価（結果・分析） 及び改善方策	
		教員と生徒の人的ふれあいを密にし、生徒一人一人の個性・特徴を生かし、大切にしてい、内面に迫る指導を心掛ける。	A		昨年度から朝の校門指導を全校体制で行っている。全教員が交代で校門に立ち、生徒に声かけをした。生徒たちの表情と内面の変化を早期に捉えることができた。	で取り組み、学校をあげての生徒指導に取り組んでいきたい。		
進路指導	個々の生徒の個性の伸張に努め、意欲的に進路実現を目指す環境づくりに努める。	スタディーサポートや各種進学補習、校外模試を計画的に実施し、学力伸長の機会の充実を図る。	B	B	校外模試の受験において、デジタルサービスを活用し、事前・事後の指導の充実を図ることができた。	Web出願をはじめ、多くのITコンテンツに対応するため、進路閲覧室の機器の更新を計画的に実施する。	進路指導室の資料やIT環境を整え、進路選択に必要な情報を生徒等に提供している。各種の模擬試験を利用した進路指導で、3年間を見通して進路指導を計画的・組織的に進めている。	
		進路資料等の整備・充実を図り、生徒への的確な情報提供に努め、進路実現に向けて高い意識をもてる環境づくりに努める。	B					
	理数科単科高校の特色を活かした進路指導に努める。また、中高6年間を見通したキャリア教育を推進する。	「探究科学」を活かした受験指導により、国公立大学及び難関私立大学の理系学部への合格者数を20人以上にする。	A	A	1・2年次での学会発表やコンテスト参加等の実績と、基礎学力の定着が、目標以上の3年の大学合格者数に繋がった。	「探究科学」の実績づくりと基礎学力定着をバランス良く両立させることが必要であることを、生徒に入学当初より訴え続ける。		S S Hの経験や3年間の探究活動を推薦入試等に生かしている。生徒の発達段階に応じた体験的な活動を通して中高6年間を見通したキャリア形成に努めている。
	中高一貫教育校として、校種間や学年間で連携をとりながら、発達段階に応じた6年間のキャリア教育を推進する。	B	中学でのキャリア教育では、職場体験、大学研究室訪問、熟練技能者による実演講話等、多くの取組を実施した。					
保健体育	体育活動をとおり、健康の意義を踏まえ、健康の維持増進、体力づくりを基盤に「生きる力」を育む。授業をとおり、体育的行事への参加率のアップを目指す。	教職員自らが健康の維持増進・体力づくりの必要性を共通理解し、授業の安全性を踏まえ積極的な工夫改善に努める。	A	A	学校行事（球技大会・体育大会）をとおり、生徒たちと積極的に関わることで、健康の大切さを体感し自覚できた。	生徒に自主性が育つ指導が求められる。計画から実施に至る運営にもっと関わらせることで充実感・達成感を体験させることが必要であると考えられる。	体育大会、球技大会については、中学生の種目及び競技方法についてはさらなる検討が必要である。	
		運動・スポーツを主体的に取り組むことにより、体を動かすことの大切さや喜びを体感するとともに、自らの健康を維持できる実践力を育てる。とくに体育行事へは、100%の参加率を目指す。また、社会の一員としての役割を意識させ、地域の催しやボランティア活動への参加を促す。	A					
		中高一貫教育の特性を踏まえ、集団での「個」を自覚させ、協調と責任ある行動をとれるよう中学、高1の集団行動を徹底する。また、2・3年生の自ら行う選択授業の主体的かつ能動的な取組を促す。	A					
	保健活動をとおり、何よりも「健康」であることの大切さを自覚し、自らを改善していく資質と能力を育む。	各種検診（健康診断）の受診率100%を目標に日程や時間帯の調整を図り、受診しやすい環境づくりに努める。	B				B	養護教諭指導のもと、スムーズに保健室運営、健康診断等の検診が行われた。感染症の流行状況を保健便りや掲示物により告知した。流行時には拡大予防のための対応をした。
生徒の健康保持・増進のため、生活実態調査や健康だより等により、随時健康管理を促すとともに各検診の完全受診を促す。また、食育を含むアドバイス・個別指導の充実を図る。	B	人間関係や家庭の悩みをもつ生徒も多く、その対応に苦慮した。また、今後、カウンセリングの充実と、本人・親・担任との連携を十分に図り、心身のケアの充実を推進したい。						
欠席者サーベイランスの活用とともに、各種感染症への迅速な対応。また、カウンセリングの推進・充実を図り、生徒の心のケアに努める。	B							

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策・評価指標	自己評価結果			成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価（結果・分析） 及び改善方策
人権教育 特別支援教育	様々な人権問題についての認識を深め、より充実した実践に努める。	様々な人権問題についての研修を深め教職員が共通理解をもって人権教育に取り組む体制を構築するため、年1・2回の職員研修を実施し、校外の研修にも参加する。	C	B	B	職員研修は「性的マイノリティ」をテーマに1回実施した。人教部員以外の職員の校外への研修参加が少ない。	校内研修を1回は必ず行う。校外研修については、2年に1回は全員参加するように働きかける。	新入生対象のアンケート調査、人権ホームルーム、講演会を行うなど計画的に人権教育に取り組んでいる。 人権だよりの発行などで、保護者への人権に関する啓発も行っている。 担任・学年主任とスクールカウンセラー、コーディネーターが組織的に連携できている。 配慮を要する生徒に対する一層の組織的取組を期待したい。
		生徒の実態に即した人権LHRを企画・立案し、その実践に努める。	B			身近な問題・体験型の人権LHR教材を学年の人教部で作成したが、全職員での内容の共通理解はできていない。		
	支援が必要な生徒を支える学校の体制づくりに努める。カウンセリングの充実をおして、的確な生徒理解と適切な支援に取り組む。	面談や小学校・中学校訪問等により、生徒一人一人の実態や課題の把握に努める。さらに、家庭訪問等日々の活動をおして、課題を抱える生徒への早期の対応を進める。	A	A		スクールカウンセラー・コーディネーター・担任・学年主任など連絡を密にして、支援を要する生徒等のケアに取り組めたが、カウンセリングが月2回なので、対象生徒が多く対処しきれない場合がある。	必要生徒の要望に応えられる方策として、授業時間内でのカウンセリングの実施も考える。	
		スクールカウンセラー、担任、家庭などと連携して、支援を必要とする生徒等のケアに努める。	A					
環境整備	自主的な清掃活動を推進し、生徒の美化意識向上を図り、学校環境の美化を推進する。	日常の学校生活で、ゴミの持ち帰り等のゴミの減量化や分別の徹底、リサイクル運動に取り組み、環境美化の意識を高め、快適な学校環境の実現を図る。	B	B	B	行事ごとの大掃除では、全体を見ながら掃除する生徒が多くなった。自分の掃除担当場所以外に特に汚れた箇所を掃除する姿から、美化意識の向上が窺える。	「地球温暖化」などに関するビデオを視聴させ、「環境にやさしい視点で、自分に何ができるか。」を、常に考えさせたい。	清掃活動にうまくボランティア活動や体験的な活動を取り入れている。
		今年度3回通学路清掃を行い生徒の美化意識の向上を図り、地域との関わりを深める。	A			各委員会に加えて、生徒会・各クラブ・中学生のボランティアが通学路清掃に参加し、それにより他の生徒の美化意識の向上につながった。		
文化図書	文化祭をおして、文化教育の充実と活性化を図り、クラスの団結力を一層強める。	文化委員がクラスを中心となり、まとめていく存在となるよう文化委員会の活性化を図る。また、できるだけ生徒の意見を企画・運営に反映させながら、生徒自らが作り上げていく文化祭を目指す。	A	A	A	クラス発表内容からクラスの一体感・団結力が感じられるようになった。それに伴って、生徒の鑑賞する態度もよくなり、全体的にまとまりのある文化祭に仕上がった。また、模擬店での飲食マナーもよく、ゴミ処理もスムーズに進んだ。	少しずつ生徒主導型に近づいているが、生徒が大いに達成感・充実感を味わうまでは到達していない。今以上に工夫を凝らし生徒に達成感をもたせる指導が必要である。	文化祭では生徒に達成感をもたせる結果とすることができた。
	読書指導の充実を図る。	新入生への図書室オリエンテーションを実施する。年9回の「図書室だより」の発行等、図書委員会活動の活発化を図る。	A	A	A	年9回の「図書室だより」の発行は、主に図書委員のお勧め図書の紹介が生徒には好評であった。	各教科と連携した図書室文化講座を行い、それが教科学力向上につながればと考えている。	さらなる読書活動の充実が望まれる。
		学級文庫を配置、また、生徒の要望に添った図書を購入することで生徒の読書意欲を高める。図書室に「テーマによる展示コーナー」を設け、生徒の関心を引く工夫を行う。	A			今年度は、「戦後70年」のテーマで本を展示し、図書室文化講座では、京都大学の出前授業とビデオ鑑賞を行った。その結果、本の貸し出し数増加にもつながった。		
広報活動	適切な広報活動を展開する。	小学校・中学校及び塾などを訪問し、全職員の協力のもと、県内の小学生・中学生・保護者等に本校の特色や活動内容をよりよく知ってもらおう取組を重ねる。	B	B	B	本校職員が奈良県内の塾に足を運び、説明会への生徒の参加を促した。その結果、説明会参加者が多く集まったが、それが十分な受検者確保までには至らなかった。	塾への広報活動に関しては、一部の地域だけでなく、奈良県全域に宣伝する必要性を感じる。全職員にその必要性を理解してもらい、学校全体として対応できる体制を確立させたい。	ホームページに学校の教育活動が多く掲載され充実してきているが、さらに、保護者や地域住民の一層の理解を得る工夫を期待したい。
		学校新聞「青翔Spirit」や育友会会報「翔揚」を発行し、保護者・生徒・地域との交流を深める。 パンフレット等を作成し、広報活動を活性化させる。	A			「青翔Spirit」を年3回、育友会会報「翔揚」を年2回発行し、生徒・保護者・地域との交流を深めた。また、パンフレットを作成し地域別学校紹介や中学校育友会来校時などで啓発活動を行った。		

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策・評価指標	自己評価結果			成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価（結果・分析） 及び改善方策
渉外	育友会活動の充実と活性化を図る。	年に2回の広報誌「翔揚」を発行して広報活動の充実と研修会等の活性化を図り、保護者との連携を密にしながら育友会行事への積極的な参加を促進する。これによって、保護者と教職員の協力体制による教育活動を実践する。	A	A	A	行事ごとに、育友会役員のまとまりが生まれ、行事運営がスムーズに進んだ。特に、体育大会や文化祭で様々なイベントに参加してもらうことで、生徒・教員との交流も深まった。	育友会活動をスムーズに運営していくために、引き継ぎの方法や任期について検討している。	
	同窓会（まほら会）活動の充実と活性化	まほら会評議員とクラス幹事との連携を強め、卒業生の同窓会行事への積極的な参加を促し、同窓会活動の充実を図る。	B	B	B	まほら会評議員会では、御所・青翔高校卒業生が、世代を超えて情報交換をした。また、10周年事業・SSH事業・中学校の活動について報告をし、様々な世代の卒業生から意見を頂いた。	まほら会役員の方々の高齢化が進んでいるので、少しずつ世代交代していく必要がある。	
理数 SSH部	科学への興味・関心を高め、人間がよりよく生きられる社会の実現に貢献できる科学技術系人材を育成するための、『体験重視型理数科教育プログラム』の研究開発を推進する。	SSH第1期の最終年度にあたり、「青翔スパイラルアップ・プログラム」及び「青翔サイエンス・スタディ・プログラム」の研究開発の成果をまとめ、全国・全県普及に努める。	A	A	A	今年度は、奈良県理化学会や奈良県生物教育研究会のみならず、全国理化学会や京都大学のシンポジウムで研究成果の普及を行った。	来年度以降も全国規模の研究会等での発表や指導資料の配付を積極的に行い、成果の普及に努めたい。	SSHに関する体験的な取り組みによって生徒の学習意欲は高まっている。今後、これらの取り組みが学力に結びつくよう授業の展開・評価等の工夫を期待する。 教職員の体験・研究に対する熱心な指導のおかげで生徒はたくさんの経験を積んできている。こうした、様々な体験学習や各種発表会への参加等で生徒たちには確かな自信が付いてきている。
		生徒・保護者及び教員へのアンケートや運営指導委員による評価において、8割以上の方からSSH事業が本校にとってプラスになったとの回答が得られるようにしたい。	B			理数科科目やSSH行事における生徒や保護者の満足度は、8割には達しなかったものの概ね良い評価が出ている。教員の意識も年々向上している。	来年度は、アンケートだけではなく、別の方法も用いてSSH事業の成果を検証したい。	
		探究活動の指導を一層強化し、延べ15本の研究を各種学会ジュニアセッションで発表する。	A			探究活動では、生徒が昨年にも増して努力し、各種学会ジュニアセッション等での発表本数が29本となった。	来年度以降も、継続して探究活動の発表機会を増やしていきたい。	
	海外姉妹校などとの交流をおし、生徒にグローバルな視点に立って物事を考える力を育成する。	A	A	英語検定の合格者数は、中学生を中心として増加し、延べ88名となった。タイでの発表会は、生徒及び指導教員の事前準備が周到であったため、タイ高校生をはじめ多くの方々に好評であった。		英語科教員と協力しながら、生徒の英語に対する意欲やコミュニケーション能力をより一層向上させる。		
	SSHの再申請に向け、具体的な実施計画を立てる。	第2期のSSH事業が、全校生徒・全職員の取組となるよう、最良の方法を検討する。	B	B	校内で「SSHの次の5年を考えるワーキンググループ」を6回開催し、多くの職員の意見を取り入れた。	今後も本校にとって良いプログラムを検討したい。		